



スキマタイムズ

もっとお互いを理解するための場や時間を



日本自立生活センター自立支援事業所 2011年5月27日発行 第2号

JCIL 被災地視察・支援団派遣&報告会開催

「障害者がどこへ行ったのかがわからない」。

福島にある被災地障害者支援センターの方の言葉です。東日本大震災や原発事故によって被災した状況のなか、障害をもつ人々が地域で暮らし続けるには途方もないバリアがあります。被災した人たちとつながりつつ京都から何が出来るかを考えるために、このたび JCIL から被災地視察・支援団を派遣することにしました。期間は 2011 年 5 月 22 日（日）～5 月 28 日（土）。脳性マヒで車いすの当事者 2 人と J C I L の介助スタッフやボランティア 5 人で、福島、宮城、岩手をまわっています。

いくつかの障害者団体がすでに現地へ支援に入っていますが、まだ圧倒的に人手不足の状況です。JCIL の支援団も、少しでも現地の人たちの力になるため、そしてまた現地の状況を生で感じ、それをこちらの人々に伝えたいという気持ちで向かっています。

状況が大きく変わらないうちに報告会を行います。

お誘い合わせのうえぜひお集まりください。

日時：6月1日（水）18:00

場所：日本自立生活センター事務所

（南区東九条松田町 28

メゾングラース京都十条 101）

☆支援団の様子は JCIL ブログでも随時更新中！

→ <http://blogs.yahoo.co.jp/jcilhontai8484>



居場所づくりの企画やアイデアを募集しています。一緒に企画をしてくれる人も大歓迎。

また「スキマタイムズ」の紙面に対する感想やご意見もお待ちしています。

日本自立生活センター自立支援事業所

TEL: 075-682-7950

E-mail: jcil-kyoto@jcil.jp

編集担当: 齋木・白川・横川

スキマタイムズがインターネット上でも読めるようになりました！

JCIL ホームページ

→ 自立支援事業所

→ 「スキマタイムズ」

(PDF ファイル)

<http://www.jcil.jp/zigyosho/index.html>



今、介助に行きます

宮元貴之

今年で介助者生活も三年経ち、転職して不安もありましたが、何とか利用者さんともうまくやれて来て、皆さんに感謝しています。以前私は飲食店を経営しており、今でもその当時のお客様とガイヘル中に遭遇して転職に驚かれますが、自分の中ではそんなに不思議なことではありませんでした。生まれた頃から周りの親戚や近所に障害をもった人たちがいて、障害への田舎独特の考え方や差別やらに対して複雑な思いや疑問を持ち続けてきたからでしょう。

ところで今回は若い頃アメリカに行って出合った事について書いてみようと思います。今から21年前の1986年の8月23日、大韓航空便で伊丹空港から韓国キンポ空港経由ロス行き28万円(当時最安値)のチケットを買って、「金髪と一発やりに行こう！」

の掛け声と共にいざアメリカLAに降り立ちました。着いてびっくりデブばっかじゃん。当時小錦の角界登場に驚いていた日本人は何と可愛いものか。それに合わせてか全てがかい。自動車も道路もコーラも…子供もでかい。着いて2日目、サンタモニカで大男たちと大女たちと車椅子二人とバス待ちするとでっかいバスがやってきた。これまたでっかい黒人の運転手がこちらをチラッと見てバスを止めるとガンダムの格納庫みたいのでっかいドアが開き中から何やら出てくるではないか。リフトである。当時の僕はそんなもの見たこともなかったので感心しながら見てたら、後ろでは乗客の大男たちがもう一台の車椅子を軽々持ち上げてひょいと乗せてしまった。その大男たちも車椅子の人も友達同士でもなく人種も違うのに、ごく自然にあたりまえのように。アメリカってすごいなあ、いいなあ、日本もこんな風になったらなあと思った夢いっぱい21歳の自分でした。

時は流れて6年後場所はN.Y、人に騙され世間に揉まれて僕も少し大人になったところです。ある日下駄を履いて近所を散歩していると後ろから車椅子に乗った黒人のおじいさんに声をかけられました。

「懐かしいなあその音、今でも下駄を履いてる日本人がいるのか。」話を聞くと朝鮮戦争の頃陸軍兵として1955年、1956年の2年間横浜に駐屯してたらしい。

JCILは機関紙『自由人』を発行しています。その人気連載である「介助のある風景」や「今、介助に行きます」では、介助をつかっている人、介助をする人が自分の生活や気持ち、生き方を綴っています。いろいろな人がいる！ということをお伝えしたいと思い、この通信でも一部をご紹介していきます。『自由人』についての詳しい情報は日本自立生活センターの金・内藤(075-671-8484)まで。

「どうだいN.Yの生活は？うまくいってるかい？」その頃精神的に疲れきっていた僕は「難しい。競争もきびしいし、人は信じられないし、どこまでいっても白人社会やし。」とやる気なく答えた。するとウイリアムスさんは笑って言った。

「簡単じゃないか。お金だ。アメリカはお金さえあれば人種も障害も関係ない。」

ドンピシャ！確かにその通り。あまりにストレートな答えに大笑いした。資本主義で移民の国アメリカではお金は信頼できる唯一の武器である。話し終わるとウイリアムスさんは白人のヘルパーに付き添われて帰っていった。合理的なのはわかるけど…ちょっと複雑、やっぱり僕は日本人やなあと内心苦笑い。そろそろ日本に帰ろうかなと思ったのはこの頃だった。

1年後に帰国。街に出てもテレビ点けてもびっくりするほどアメリカナイズされていました。気が付くとバスも電車も車椅子の乗客を見かけるようになっていた。それは単に世の中の流れでバリアフリーが進んだのではなく欧米諸国に学び、車椅子で飛行機に乗って渡米して視察し行政側に働きかけた結果そうなったのだとJCILのM川さんから教えて頂きました。ちょうど自分が在米していた頃と重なり共感できました。

まだまだですが、これからも今までの人生経験が介助やバリアフリー推進に役立てられるようがんばっていきたいと思っています。

(2007年5月13日「自由人56号」より掲載)

こころとからだをすっきり！ヨガタイム

ヨガで自分の身体と向き合ってみませんか？

ヨガの目的はきれいなポーズをとることではありません。

その日の身体がどんなふうに動くか、動かないか、意識を自分に向ける時間です。呼吸が深くなり、肩こり・腰痛・疲労感もやわらぎます。初めてでも、体がかたくても、ゆっくり自分のできる範囲で行うので大丈夫です。男女問わずぜひ参加してください。講師は石田久美さんです。

★イスヨガ: 車いすやイスに座って行うヨガ

今回は上半身を動かします。

日時: 6月21日(火) 17:00-17:30

場所: 日本自立生活センター事務所

持ち物: 上半身は動きやすい服装

費用: 無料

★ヨガ: 全身をうごかすヨガ (介助者のみ)

日時: 6月10日(金)、21日(火) 18:15-19:30

場所: 油小路事務所1F

持ち物: 動きやすい服装・タオル・飲み物

参加費: 無料



居場所づくり勉強会第8弾！ 「ひきこもり、不登校、私の場合」

こんにちは。介助者の高橋典子です。このたび、お声をかけてもらい、母とともにお話することになりました。「不登校」も「ひきこもり」も、この十数年で一般的な言葉になりましたが、その内実、とくに苦しさは、あまり一般化されていないと感じています。

私は、高校生で不登校になり留年・中退、ひきこもりしました。「社会復帰」は短期アルバイトから。20代で2度の就職をしましたが、どちらも結局は「人並み」の無理ができずに、倒れこむように辞めています。そんな私が自己否定におぼれてしまわずに、なんとか生き続けているのは、本当にたくさんの出会いのおかげです。

また、小さな新聞を発行している全国不登校新聞社というNPO法人で編集の仕事をして5年間したことと、母が、京都・学校に行かない子と親の会や「非行」の親の会にずっと関わってきたことで、私たちが得られた気づき・情報なども、お役に立てばうれしいです。

日時：6月28日（火）14:00-16:00
場所：日本自立生活センター事務所
参加費：無料
担当：小泉

プログラム

第1部 本人のしんどさ 高橋典子
第2部 親や周囲のしんどさ 高橋素子
第3部 質疑応答・歓談など



居場所づくり勉強会第6弾報告 「基地問題」ってどういう問題なんだろう？

4月の居場所づくり勉強会では、沖縄基地問題を取り上げました。JCILの介助者の方には何名か沖縄基地問題に取り組んでいる方がおられます。今回報告してもらった三保谷さんと堀池さんも、ときどき実際に沖縄に行き、基地反対の支援活動にあたっています。

三保谷さんからは辺野古のこと、堀池さんからは高江のことが聞けました。沖縄基地問題の基本と、そしてお二人の中にある支援者としての葛藤についてお話しが聞けました。

辺野古は、米軍普天間飛行場の代替施設の移転先となっており、その基地建設をめぐる数年にわたり反対運動が続けられています。また、高江でも、米軍基地の一部返還に伴うヘリパッドの移転工事が行なわれており、それをめぐり住民が反対の声をあげています（写真は工事阻止の活動中の堀池さん）。



どちらの地域においても、反対派の住民もいれば、基地容認派の住民もいるようです。その両者の間の対立がシビアでとても心苦しいものです。基地は、住民同士の分断をもたらします。基地に

よって、表面的には町にお金がまわる側面もあります。けれども、長い目で見たら、基地は町全体を荒廃させていく。基地は罵声と怒号を町に広めていきます。

また、お二人の中にある葛藤というのは、本土から基地反対を支援するということ、自分たちがいわば基地を沖縄に押し付けた側におり、そして本土に帰り暮らすことのできる立場にいながら基地反対を言うことなどから来る葛藤です。そこにはある意味で、「健常者」という立場からくる葛藤と構造的に同様なものがあるように思いました。

普段介助をしているときとは違った顔を見せてくれた介助者の三保谷さん、堀池さんでした。朴訥とした語りや写真をつかった説得力ある語りで、わたしたちに考える時間を与えてくれました。ありがとうございました。




入院中に介助者がいなくて困ったことはありませんか？

—— 誰が制度を利用できるの？ ——



前回のスキマタイムズでご紹介した「入院時コミュニケーション支援員派遣制度」。この制度を使えば、入院中も介助者に来てもらえるかもしれません。2回目の今回は、この制度を利用できる要件について詳しく解説します。


◆質問形式で制度について解説します！



★登場人物

コウチさん

京都市で自立生活をしており、1日18時間重度訪問介護を利用している。入院すると利用時間がなくなるので不安。この制度の事はあまり知らない。今度入院することに。



カガワさん

コウチさんの近所に住んでいる。事情通な人。



「入院時コミュニケーション支援員派遣制度」は誰が利用できますか？

- ・ 障害者自立支援法の重度訪問介護又は行動援護の利用対象者
 - ・ 障害程度区分6の方、及び6と同等の状態にある方
 - ・ 意思疎通が困難
(トーキングエイド等の使用により対応できる場合を除く)
 - ・ 京都市内で在宅生活をしていること
(施設入所者やグループホーム入居者は含まれません)
 - ・ 利用希望者が原則として京都市内の医療機関に入院し、当該医療機関から医療機関承諾書により支援員の派遣が承諾されていること
 - ・ 単身世帯であること、又は、介護者不在の状況にあること
(居宅の実態に基づいて判断します。保護者や介護者が疾病、障害、事故、他の世帯員への介護、葬儀への参列などで、単身世帯と同様の状態になる場合に該当します)
- ※上記のいずれにも該当する方が利用可能です。



※出典:京都市保険福祉局発行「各機関共通・暫定マニュアル」



利用時間は決まっていますか？

年間 105 時間です。
105時間以内なら間隔を空けた派遣や複数回の入院でも利用できます。



☆3回目は制度の利用対象外の方へのお知らせを掲載します。

※緊急の方や該当しないと思われた方もまずは事業所にご相談下さい。

